日本政策金融公庫

技術の窓　№2542　　R4.1.25

自動給餌機導入で
酪農経営のゆとりと所得アップ

北海道における酪農経営の約７割を占める繋ぎ飼養経営では、牛舎の建替え、自動給餌機等の省力機械導入による労働負担の軽減が喫緊の課題となっています。 そこで、北海道立総合研究機構酪農試験場では、繋ぎ牛舎の建替え、増頭に際する濃厚・粗飼料自動給餌機の導入により、経産牛１頭当り労働時間を約１割程度削減でき、経産牛 60 頭から 90 頭に増頭するとともに、濃厚飼料、細切りサイレージの多回給餌により乳量を５%以上向上させること、総合耐用年数内の資本回収１時間当り農業所得の増加が可能となること等を明らかにしましたので紹介します。

☆ 技術の概要

１．濃厚・粗飼料自動給餌機の導入する経営は、濃厚飼料、細切りサイレージの多回給餌（6.5 回）を行う経営では、導入により、飼料効果を平均 6.9%向上させています。

２．濃厚・粗飼料自動給餌機を導入する経営は、給餌車等による給餌を行う経営に比べて、飼料給与に要する時間が短いことから、経産牛１頭当たり労働時間は約１割程度短くなります。ただし、ロール収穫体系の場合、サイレージの積込前にロール細断を要することから、飼料の調理・給与・給水に係る作業能率が劣ります。

３．濃厚飼料、細切りサイレージの多回給餌により、飼料効果（乳量）を５%以上向上させることで、乳代 90 円/kg、個体販売価格が高騰前の水準でも、総合耐用年数内（17.2 年）での資本回収が可能になり、農業所得および１時間当たり農業所得の増加が期待できます。

写真１　自動給餌

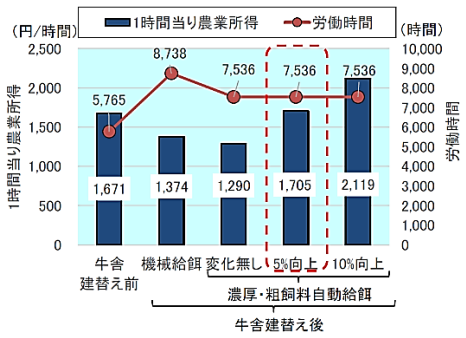

図１　自動給餌機導入の経済効果

☆ 活用面での留意点

１．多回給餌による飼料効果（乳量）向上は、適切な飼養管理、飼料給与量を前提としており、 本成果は、草地型酪農地帯である釧路地域における繋ぎ飼養経営を対象とした調査に基づいています。

２．なお、詳しくは、北海道立総合研究機構酪農試験場乳牛Ｇ濱村寿史（℡0153－72－2158）に問い合わせ下さい。

（日本政策金融公庫農林水産事業本部　テクニカルアドバイザー　加茂幹男）